阿多多羅

第108号
発行
令和8年2月28日
責任者
福島県公立学校
退職校長会安達支部
佐藤英之

【巻頭言】

子育ての内実

顧問　久保恒義

先年の夏、『加賀つれづれー障碍児・者とのそぞろ歩き』①—③という凡そ半世紀に亘る多様な実践記録を読む機会に恵まれた。著者は元金沢大学教育学部教授・アカシヤこどものへや代表の木村允彦先生である。

巻を追う中で子供たちと係わる経過を読み重ねていくうちに脳裏に浮かんできたのが、次の良寛の無題の漢詩であった。

花は無心にして蝶を招き
蝶は無心にして花を訪ぬ
花開く時　蝶来たり
蝶来たる時　花開く
吾もまた人を知らず
人もまた吾を知らず
知らず帝則に従う　注1

つまり、人と人との関係がうまく展開するのは、立場や境遇が異なっていても、肌が合い、息が合うという感覚をお互いが持てれば自然に近づき、理解し合えるものであり、その微妙な関係を、良寛が蝶と花を例えに詠んだこの詩は、子供との係わりの在り方を考える時、重要な示唆を与えてくれていると思ったのである。それ故、ここで一言触れておきたいことは、「花開く時　蝶来たり、蝶来たる時　花開く」という蝶と花との関係である。つまり、蝶と花とが共感し合ってこそ、蝶も飛べるし、花も咲くことができるという持ちつ持たれつの関係である。

そして、終結部分の三行に、子育て関係を重ねてみる。おとなは相対する子供を知らないと言い、子供も対面するおとなのことは何も知らないという関係にある。そんな状況にあっても、どうしたことか帝則に適っているというのである。

さて、この『帝則』であるが、ここにピタリと嵌る言葉が、芭蕉に親炙した服部土芳の隋聞記『三冊子』中の「あかさうし」にこうある。

松のことは松に習へ、竹の事は竹に習へと、師の詞のありしも、私意をはなれよといふ事也

間を置いて、この言葉を敷衍するように、こうある。

句作になるとするとあり。内を常に勤めて物に応ずれば、その心のいろ句となる。内を常に勤めざるものは、ならざる故に私意にかけてする也。

つまり、『帝則』とは、芭蕉の言葉を借りれば、「私意をはなれよ」ということになる。

したがって、その時々の丁寧な係わりをしていても、子供一人一人の生活の流れを止めてしまって、おとなの用意した土俵に誘い、そこで勝負をしていては子育てとは無縁に終わる。幸いにも書中には皆無であった。

因って、子供の実際の生活から乖離のない係わりの要諦を記した一節を転載し終りとする。

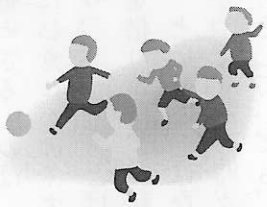
教育は、子供自身の生命活動の躍動、躍進をちょうどよい時期に適切に、適度に助けて、そのときそのときの充分な開発の実現を期することにあります。教育にたずさわるおとなは、うまくいかない場合に、その自らの努力がむなしかったり、その期待が裏切られたなどと嘆いたりうらんだりするのでなく、おとな自身の助け方が時期にあわず、そのときの対処のしかたが適当でなかったり、そのときの状態に対して、その助け方の程度に過不足があったことを自分から反省し、助け方を革めていくことなのです。注2

注1　星野清蔵「良寛の詩境」弥生書房　1975
注2　梅津美世子、外「おんがくのべんきょう」（上）音楽之友社　1980

【教育随想】

変わらないもの

安達地区小中学校長会協議会
会長　太田孝志



校長室の窓から今も昔も変わらない風景が見られます。寒い日でも校庭で、元気にサッカーボールを追いかけて、友達と歓声を上げて遊ぶ姿、校庭の脇にある草むらで、宝物がないか一生懸命に探す姿など、子どもたちの休み時間での姿です。

何かに夢中になっているときの、心の底からあふれる無邪気な笑顔。小さな虫や植物を見つけようと必死に探している、尽きることのない好奇心。段ボール、枝や落ち葉が秘密基地や遊び道具にもなる、無限の想像力あふれる創造性。草や木、土や水など自然との関わりから生まれる、様々なことを知ろうとする探究心。けんかをしたり、笑い合ったりしながら育む仲間との絆。失敗を恐れずに新しいことにも挑戦しようとする勇気。

変化の激しい時代だからこそ、変わらないものがあることへの安心感、時代を超えて共感できる価値に気づかされます。学校が子どもたちの心の拠り所となって、今も子どもたちの変わらない日常がそこにあることを見ることで、なぜか自分の心にも安定をもたらしてくれています。

私が教員になった平成元年頃と比べると、学校においても大きな変化が見られます。情報収集の容易さや流行の移り変わりの早さ、情報量が多くなりスピードが速くなりました。オンラインでの交流や多様な価値観へ触れる機会など、コミュニケーションの形や内容も変わりました。子どもたちがデジタル化へ対応し、タブレットなどを思い思いに使用していること、早い時期から専門的なものへ関心をもつなど、興味関心の多様化もあります。個性や興味の幅がより広がって豊かにもなってきています。

しかし、今でも決して変わらないもの、変わってはいけないものもあると思います。

新しいことへの関心・探究心など、一人一人がもっている学びへの好奇心や学び続ける意欲が大切であること。子どもにとって安心できる場所は、家庭であり学校であること。家庭での子どもへの愛情と学校での安全安心な居場所が、本人の成長に欠かすことができないこと。家族との絆や教師との関係など、地域の方も含め信頼できる大人の存在がとても大きいこと。社会で生きていくための協調性を育み、協働できる力を育成するためには、友達との交流が欠かせないこと。

どんな時代でも、子どもたちの心が安定し成長していくためには、周りの人たちとのつながりや温かい心の交流が不可欠であることは、今も昔も変わらないものだと思います。

今までの先輩方が、その時代その時代の学校教育のあり方、校長として果たす役割や指導性について、常に時代にふさわしい理想を掲げ、課題解決のために取り組んでこられました。「安全安心で子どもたちの笑顔あふれる学校」への思いやご努力が、変化の激しい現在にあっても、今もなお確実に変わらないものとして、受け継がれています。

時代の流れによって変わるものがあるとしても、理解し受け入れて、子ども一人一人が自分らしく輝けるように、私ができることを、これからも考え、取り組みたいと思います。

昼休みに校庭にいると「サッカーしよう。」と声を掛けられることがあります。「あまり走れないよ。」と伝えると、手加減してくれます。

その優しさに触れ、心が温かくなります。「うまい。」と褒めてくれるときもあります。昔は、子どもに負けまいと本気で、時には手加減していたことを懐かしく思います。年齢や立場が変わり、自分自身の中で、変わるものを実感しています。

現職校長との教育懇談会開催

令和七年十二月五日（金）に二本松御苑において、毎年恒例となっている現職校長との教育懇談会が開催されました。本会会員三十一名、現職校長二十九名が参加し、今年も盛大な会となりました。

懇談会冒頭では、佐藤英之本会支部長の挨拶に続き、太田孝志小中学校長会協議会会長（二本松南小学校長）の挨拶がありました。

グループごとの懇談会では、和やかな自己紹介から始まり、その後、現職の校長先生方から、各学校の特色や現状、課題等について発表がありました。それを受けて、退職校長先生方は、質疑等でさらに深く各学校の学校の現状を理解した上で、それぞれの課題等に対し、これまでの経験を踏まえたアドバイスをしました。学校現場では、多様化する子どもへの対応（いじめ、不登校、外国籍・貧困家庭の児童増加など）、教員の長時間労働や教員不足、子どもの学習意欲の低下など多岐にわたる課題があることを感じた懇談会でもありました。

教育懇談会の御礼

安達中学校長　大和田康夫

師走、今年を振り返れば、多くの教育課題がありました。不易なものとしては、学力向上、ＩＣＴ対応、不登校生の対応など、また、酷暑、熊、感染症対応など、今年も、大変厳しい一年になりました。各学校では、持てる教育機能を駆使し、何とかここまでたどりついたと感じているところです。

さて、退職校長会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。また、去る十二月五日に開催されました「退職校長会と現職校長との懇談会」では、多くの先輩方に出席頂き、温かいご指導、ご助言を頂いたことに厚く御礼申し上げます。また、引き続いての懇親会では、楽しい、充実した時間を頂いたことに、重ねて感謝申し上げます。ありがとうございました。

さて、昨今の学校は、社会の多様化を写す鑑のごとく、その学校経営上の課題も、多様化、深刻化をしているな、と日々実感しているところです。そのような中で、それぞれの時代に、教育の「不易」と「流行」に真摯に対応され、学校を営んできた、先輩校長先生方の存在、そのものが我々現職校長を支えてくれていることも、懇談会を通じて実感し、心強く思いました。懇談会の中での先輩方の一言一言が、いかに有り難かったか、今、改めて感謝しております。

末筆ながら、安達地区退職校長会の皆様の一層のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げるとともに、安達地区の小中学校が、さらに発展して行くことを祈念申し上げ、感謝の言葉といたします。

叙勲受章の紹介

瑞宝双光章

佐藤　吉郎　様

（元 大玉村教育長）

☆☆心よりご冥福をお祈り申し上げます☆☆

従五位

前田　長　様

令和七年十二月六日ご逝去

（元　安達中学校長）

会員随想

糖度十八度

小泉　裕明

東和果実酒研究会に貸していた畑にブドウの木が植えられていました。退職したときにブドウの木の撤去をしてほしいと話をした所、「協力するので継続して栽培してほしい」とお願いされました。

農業は初めてで、ブドウ栽培方法など全く分かりませんでした。果実研究会の本多さんが教えてくださるとのことで栽培を継続することにしました。

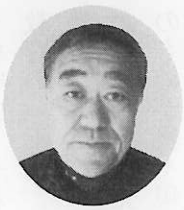
写真は、一年間の活動を終えて休眠状態の一月のブドウです。これを一月から三月までの間に短梢剪定か長梢剪定をします。やり始めの四年間は短梢剪定栽培をしましたが、現在は新しい太い枝を使っての長梢剪定を行っています。

三月中旬には、硫黄合剤を希釈し病気予防の為に枝全体に散布します。また、枝の根の付近にはガットサイトを塗布し害虫がブドウの木の中に入ることを防ぎます。

四月下旬から五月初旬にかけては芽が沢山でてきます。その中で、どの芽を残して実らせるかを考えて芽欠きをします。また、ブドウはツル性の植物ですので長く上に伸びます。その伸びた枝を誘因テープで留め、支柱の横に張ったエクセル線に留めます。そして、枝の葉が出てきた所から新しいツルが出てきます。よく「子・孫」と言いますが、新しく出たツルの処理を繰り返し行っています。殺菌・殺虫の消毒は防除歴を参考にしています。

今年も、暑さに負けず、出荷時の糖度「十八度」を目指して栽培していきたいと思います。

退職五年目の年を迎え



遠藤　春光

新年おめでとうございます。

午年は、前進や躍動といった力強い言葉で言い表されるようで、聞いているだけで「今年は良い年」そんなポジティブな気持ちになってきます。

私は、退職してから市の家庭児童相談員として勤務し四年が過ぎようとしています。当初は市役所一階で、子育て支援係や障がい福祉係の皆さんと一緒に仕事をしていました。

令和五年のこども家庭庁の発足により、市でも昨年こども家庭課を安達保健センターに新設しました。「妊娠から子育てまで切れ目のない支援」を目指すもので、私たちも同センターでの勤務となり保健師さんと連携して仕事にあたっています。

福祉行政に携わり家庭の様々な状況や子供を取り巻く厳しい環境に直面します。少しでも力になればとの思いで取り組みますが、期待するような成果は得難いのが現状です。

そのような中、課題が改善に向かったり、面談などにおいて明るい表情が見られたりすると心からほっとします。

例えば、集団の中で表情が乏しかったAちゃん。実は場面緘黙で人前での話が苦手だったのです。療育につなぐことで話すことが少しずつ増え、かわいい笑顔にも驚かされました。母が不安症で外遊びもなかったBちゃんには、支援員派遣の制度を活用しました。支援員とともに母と体を動かして遊んだり散歩をしながら行動が広がったりする中で、いつの間にか癇癪の改善にもつながりました。

この四年間、困り感に寄り添い専門機関や諸制度につなぐパイプ役としてどうにかやってこれたかな?そんな気持ちです。

今年、私は六十代後半を迎えます。後任の方がいれば一区切りをつけ、自分の時間、自分のやりたいことを大切にして前に進んでいく。そんな年になればと思っています。

会員十年目の近況報告

退職後十年を迎えて

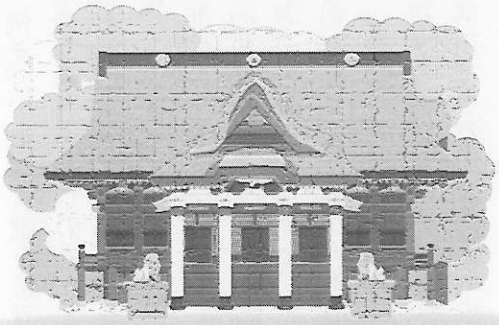
服部　啓吉

中学校・小学校・青少年教育施設等に三十八年間勤務し、平成二十八年に退職いたしました。現役中は、余裕がなく、多忙な日々を過していて、周囲の自然環境やその変化などにも、気付かない生活を送っていました。退職後は、周回の草花や環境の変化等に気付いて、桜や紅葉などを見る機会が多く、県内外の神社や寺院などを見学し、歴史や関係した人々など多く知ることができました。

改めて、自分が勤務した場所等を訪れ、自然環境や周囲の地形等を観察すると、当時の生活とともに児童・生徒・地域の人々と一緒にとりくんできたことが思い出されました。全国各地の神社や寺院を訪れると、当時の人々の生活や歴史を深く知れて大変勉強になりました。

現在は、健康面で、筋力や脚力などの衰えを感じ、通院等をくりかえしております。健康の保持のため、毎日三十分程のサイクリングにつとめております。また、脳の活性化の為、漢字やクロスワードパズルの実施やスポーツ番組の観戦などにとりくんでおります。

今後は、今までに知ることのできなかった歴史上の人物や歴史等知識を増やせるよう神社や様々な建物等見学できるようにつとめていきたいと考えております。



会員十年目の近況報告

最後の小さな社会貢献

青田　誠

「ちょっと痛いですがそのまま」と担当者の言葉。ただし、今後はこの言葉を聴くことはないということ・・・。

私が古希を迎える前日に、献血をしてきた一コマです。以前から機会があれば献血をしてきました。献血をするきっかけは、約五十年前の出来事にあります。当時は手術などを必要とする病気の場合、患者の容体によっては、輸血用の血液を身内で対応する必要があったのです。親戚の一人が血液の疾患で、大学の附属病院に入院していたのです。定期的に薬物治療をするのですが、その度に輸血が必要なのです。病院から今回は五人分の血液を用意して下さいと指示があれば、人数を揃えて病院に行き採血をするのです。正直のところ、病気の心配よりも輸血をしてもらえる人を探すのが大変でした。命を繋ぐためとはいえ当時を振り返れば筆舌に尽くしがたい思いでした。現在は、改めて云うまでもなく仮に輸血を必要とする病気でも、血液センター等のシステムが機能しており、輸血をする人を身内が探す必要はありません。

昨年の夏献血をする際、生年月日を申告すると、「次回が最後ですね」と担当者から告げられたのです。「最後ですね」と言う言葉が過去の情景を浮かび上がらせました。何故か複雑な寂しい気持ちになりました。

ところで、仕事から解放された今、「何をしているのですか」と訊かれることがあります。庭のバラや草花の手入れや風景をスケッチしていると答えています。この頃は、庭で作業をしていると、散歩中の方が足を止めて咲いている花などについて会話をすることが多くあります。中には手入れの仕方などを熱心に尋ねる方もおります。「きれいな花ですね。」と云われると何となく嬉しい気持ちになります。もう献血はできませんが、今後は花を育てることが私の小さな社会貢献かもしれません。

新入会員の挨拶

新たなステージへ

佐藤　隆宏

「教員を終える」という節目は、一つの役割の終わりであると同時に、新たな社会貢献の始まりでもあります。

教育現場で培われた資質能力は、子どもたちの個性を見抜き、それぞれの能力を引き出す指導力はもちろんのこと、保護者との連携、同僚との協働、地域住民との対話を通じて培われたコミュニケーション能力は、あらゆる場面で真価を発揮します。また、多忙な業務の中で培われた時間管理能力、計画策定能力、そして予期せぬ課題に直面した際の危機管理能力や問題解決能力は、どのような組織やコミュニティにおいても中核となる力です。

これらの能力は、学校を離れても、地域の活性化や社会の発展に大いに貢献できる、貴重な「社会資本」と言えるのではないでしょうか。

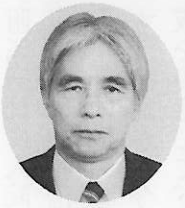
例えば、地域貢献を希望される教員OB・OGの方々と、人材を求める学校や地域団体とを繋ぐ「人材バンク」の構築や、生涯にわたる学びを支援するための研修プログラムの提供などが考えられます。また、皆様自身の経験を振り返り、体系化する「教師の学び等の振り返りを支援する仕組み」を、退職後にも活用できる形に発展させることで、新たな活動への一助とすることも重要になります。

「令和の日本型学校教育」を実現するためには、学校という枠を超え、多様な専門性を持つ人材が地域全体で子どもたちを育む体制が不可欠です。

教員を終えられた皆様は、その中核を担う存在として、地域社会に新たな活力を吹き込んでいただきたいと願っております。この新たな人生の章が、社会にとって大きな価値を生み出すものとなるよう、心よりお祈り申し上げます。

新入会員の挨拶

「役職定年となりましたが…」



齋藤　直

昨年度末に二本松第三中学校で役職定年を迎えました。思えば社会科教員として安達地区を中心に阿武隈山系の学校ばかりをまわっており、いつも安達太良山に背を向けて通勤していました。我が子も通った母校（厳密には岳下中ですが）の二本松三中の校舎から安達太良山を間近に見ながら最後を迎えることができたことは、本当に幸せだったと感じております。

しかしながら、今年度は特例任用校長として東和小学校に勤務しており、退職した実感は全くありません。三十六年間中学校教員であったので、初めての小学校勤務（教頭で小中一貫校に二年間はいましたが…）で戸惑うことばかりです。「小中の文化の違い」とよく言われていますが、小学校の先生方の緻密さと丁寧さに頭が下がる思いです。また、子どもたちに対する言葉の使い方も勉強になります。中学生には普通に通じていた話を低学年の児童にどう伝えるか、日々学んでいるところです。来年度に東和中学校と校舎併設型の小中一貫校となる予定です。現在教育課程や行事、教員の相互乗り入れ等の準備を話し合っているところですが、課題は多く、一筋縄ではいかないようです。「早く楽になりたい」「自分の時間をもちたい」という気持ちもありますが、最後のご奉公として何とか土台を作りたいと考えております。

若い頃は、部活動と生徒指導に明け暮れ、家族にも迷惑をかけてきた訳ですが、あっという間に還暦を過ぎ、今を迎えた気がします。まだ両親も健在で、休日は実家の農地も放ってはおけず、介護と農作業を老体に鞭を打ちつつ頑張っています。幸いにも長寿の家系なので、あと三十年ぐらい老後があると考え、残りの人生を考えようかと思っています。

これからも様々な場面で諸先輩方にご指導をいただきながら、地域に貢献できればとも考えております。